

火野葦平「異民族」論

——戦争の無意味さと平和への希求——

増田周子

はじめに

火野葦平は、インパール作戦（昭和十九年三月八日から七月三日）に志願し、陸軍報道班員として従軍した。そしてその体験をもとに、数多くの小説やエッセイ、評論を残している。もともと、火野が従軍するのは、四月二十五日からであり、この作戦は日本が不利になりつつあるときから参加することとなる。自らも参加した平和会議「アジア諸国会議」の準備委員会での講演で、火野は「インパール作戦はいろいろな意味で無暴きわる作戦であつて、日本の兵隊たちの苦悩も言語に絶するものがあつたのである。」^①と述べている。この作戦では、南方軍寺内寿一元帥、ビルマ方面軍河辺正三中将の下に牟田口廉也率いる第15軍がおかれ、第15軍の下に「烈」（第31師団）「祭」（第15師団）「弓」（第33師団）の三兵团が編成された。^②「烈」は北方コヒマ方面、「祭」は中央方面、

「弓」は南方面からアラカン山脈を越えてインパールを目指すものであつた。

昭和十九年三月八日に始まつたインパール作戦は、当初は、四月二十九日の天長節までに終了する予定で始めたが、^③雨期になつてもインパールを攻略できず長引いたために、三師団だけで三六二四五人^④という多くの餓死者、負傷者、行方不明者を出し、歴史的敗北を喫した。インパール作戦は、補給線を軽視した杜撰で無謀な作戦であり、火野の述べるように、死の作戦とも呼ばれる悲惨な結果を残したのである。

本稿では、インパール作戦にもとづいた作品の中から、「異民族」をとりあげ、火野が記したインパール作戦『従軍手帖』と対比させながら、作品のテーマについて考察していきたい。「異民族」には、火野の自筆の「創作ノート」^⑤が残っている。まだ未公開のものであるが、表紙に「昭和23年9月起」とあることから、

書かれた正確な日付は不明であるが、作品初出発表の直前だとみられる。(画像①) 本稿では全文の公開はしないが、一部考察に使用する。「異民族」には、先行研究に解璞「『小鳥の交響楽』と異民族の言葉——火野葦平『異民族』試論」⁶⁾がある。「『小鳥の交響楽』」に注目し、鳥の鳴き声と異民族の言葉との関係を分析したものであり、火野の『従軍手帖』との関係を踏まえて、「異民族」を論じたものではなく、本稿の論旨とは重ならない。さて、当然ながら、「異民族」は、フィクションであり、作品そのものだけを分析することはできる。だが、インパール作戦の原住民特殊工作を描いた作品であり、実際の戦争を背景に描いている本作品には、実在する人物も偽名で登場するため、事実なのかそうでないかを検討する必要もあると判断している。なお本論では昭和二十五年三月一日発行の『青春と泥濘』(六興出版)収録の「異民族」を、火野のインパール作戦『従軍手帖』は、火野の手帖を全文翻刻した『火野葦平インパール作戦従軍記』⁷⁾をテキストとする。

一 田谷上等兵らの小鳥判定

「異民族」は、昭和二十四年九月一日『思索』(第二十六号)に発表された。全八十枚の中編小説で、昭和二十五年三月には『青春と泥濘』(六興出版)に収録された。火野は、『青春と泥濘』の「後書」で「『異民族』は『思索』九月号に発表したものだが、インパール作戦を、原住民のチン族工作という裏面から見たもの」⁸⁾

と述べている。この『青春と泥濘』(六興出版)には表題作「青春と泥濘」と「異民族」という二作が収録されている。「青春と泥濘」は、インパール作戦の表面、「異民族」は裏面を描き、曾田中将、瀬川軍司令官などの登場人物は両作で共通する。ちなみに、曾田中将は、「三」(第33師団)の最初の師団長、柳田元三中将を、瀬川軍司令官は牟田口廉也中将を指す。

「異民族」は、原住民の特殊工作の任務を任された加美川中尉を中心に話が展開する。この加美川中尉は、火野の『従軍手帖』に登場する稲田中尉と正田中尉などをミックスさせた上で創造した人物だと考えられる。作品の最初の方で加美川中尉の人となりが必要なように説明される。加美川は二十六歳であるが「精神堅確、沈着剛毅、任務ニ忠実ニシテ全軍ノ作戦ヲ有利ナラシムル勲功ノ数々」を賞せられ、「軍司令官や、師団長の感状を四枚も貰つてゐた」。だが、「どこか加美川中尉の顔を老人じみて見せ」、「これまで隊長が全部口をあけて笑つたことを、部下のたれも見た者はない」のであつた。加美川は、自分は末子で、「いつでも戦場で命がすてられる」と常日頃より言い、死を覚悟していたのである。「部下の或る者は、このまだ若い将校が、快活さも闊達さもなく、ろくに笑ひもしない性格に、なにかの陰影を感じてゐた。」との記述もある。すなわち、二十代にも関わらず特殊工作を任された加美川は、その重責を担い、死を意識し、暗い影を漂わせていた。「異民族」は、テイデムという「前線からでも、後方からでも、恰

好の中間駅場」付近を舞台にした特殊工作を描いている。「前線には、もはや、食料も、弾薬も、衛生材料も、そして、兵員もなかつた。しかし、それらのものは送らうにも、テイデウムにもなく、後方からも来ない」し、「最前線はほとんど孤立してゐるといつてよかつた。玉碎し、全滅する部隊の報告は、前線からかへつて来る負傷者の群によつて、連日のごとくもたらされる」状態だつた。さらに、「すでに五月は雨季にはいり、山も木も岩も家も押しながす豪雨は、ほとんどの橋梁と道路とを流失させた」。連合国軍に攻撃され、雨季という悪条件も重なり、食料も武器もない末期状態の日本軍の様が描かれる。実際のインパール作戦でも雨は激しかつたらしく、五月十日ごろの様子として牟田口の次のような焦燥が記録されている。

牟田口中将は転進途中今後の作戦指導についてあれこれ心を痛めていた。当時既に雨季の兆は濃く、時々強い驟雨があつた。車窓から見るマニプール河畔の風物には雨季増水期におけるすさまじい痕跡が随所に認められ、雨季入り後の補給の困難さが痛感された。

このような中で、加美川もインパール作戦の膠着打開に悩み、自分の死を意識し陰鬱さを感じていたのだ。加美川の部隊は、「十七人の一隊のうち、十人はチン人の兵隊、一人ゴルカ兵がまじつて

ゐる」。また、工作員の小隊長モンサンカインは、「吊りあがつた狐のやうな眼だけが際だつて白く鋭く光つてゐる」と描写され、「ゴルカ兵モンバハドルの狡猾さうな細い眼が、なにかうす笑ひに似たものをたたへてゐるのが目立つ」とある。そして「つき立つた言語の障壁のかたに、重大な、まかりちがへば命にかかはるものを読みとらうとする彼等の眼光は、つねに真剣だつた」。工作員の原住民たちも、自分が有利に動けるよういつも緊張しながら日本兵を観察していたのだ。なお、モンサンカインは『従軍手帖』に登場する人物であるが次章で説明する。

さて「異民族」には冒頭に、加美川の部下、田谷上等兵が現地にいる鳥の鳴き声と鳴き声に合致する鳥の名をチン兵に教えて貰い、形と色と寸法との下に鳴き声の区別を記した小鳥表を手帖に書き留めているという描写がある。田谷は「小鳥博士」と呼ばれていた。

まるで、交響曲だ。「ケツキヨ、ホーチャホ」「プツ、プツ、プツ」「チャカホコヂヤー」「リ、リ、リ、リ」「ゴツコー」「ペヨ、ホーチャカホ」「チ、チ、チ、チ」「ポツポーホオイ」「チユク、チユク、チユク」「ツツチイロ」「テンクワクワクワ」「チイヨ、チイヨ」「コワオ、コワオ」——およそ三十種類ほど。

〔異民族〕 339頁

五月十七日のインタンギでの火野の『従軍手帖』にはこの描写と酷似した小鳥の鳴き声が記されている。

○鳥の声。「チャカホコヂヤー」「ブツ、ブツポーソー」「ケツキヨ、ホーチャホ」「ゴツコー」「ペヨ、ホーチャカホ」「チ、チ、チ、チ、チ、チ」「ポツポーポオイ」「チユクチユクチユク」「リ、リ、リ、リ、リ」「ツツチイロ、ツツチイロ」「テンクワクワクワ」「チイヨ、チイヨ」「コワオ、コワオ」その他。

(『火野葦平インパール作戦従軍記』114頁)

インタンギには、小鳥が沢山いたのであろう。『従軍手帖』の彼方此方には、多くの小鳥に出会ったことが、記されている。なお、『従軍手帖』の四月三十日には「○さまざま小鳥の啼き声の交響楽」とも書かれていて、作品に生かされている。

田谷上等兵を「小鳥学の權威にしたのは、この戦線にきて、凄惨としかいひやうのない前線の犠牲と、動きのとれぬ交綏状態にもとづく後方のやむなき単調の日々、焦燥と退屈まぎれ、そして単なる気まぐれにすぎない」という。田谷は退屈まぎれに小鳥に没頭し、そのうち矢野軍曹と小鳥の鳴き声から名前を当てるといふ賭けをし始めた。火野の『従軍手帖』の五月十六日にも「寝て暮らす。いやな退屈さである」と記されているが、戦争中でも、身動きがとれない時など同じ場所に停頓することになり、退屈な

日々を過ごさせられる。田谷が小鳥判定をのんびりできるほど爆撃が来なければ戦時でも退屈なのである。そして、インパールへの山道は険しい森林地帯で「原色のあざやかさを持った美しい小鳥」が何羽も飛び交う自然豊かな場所であった。

二 田谷上等兵の死去とオンギンの殺戮

ある日、加美川中尉の隊は、ランザン部落にスパイ検索行に向かう。このスパイ検索行は、「十中八九、血なまぐさい事件」がおこる、緊迫したものであった。ランザン部落に向かう途中で、激しい爆撃があり、田谷は「鉄兜のうへから、まつすぐに頭蓋骨を撃ち抜かれて、一言も発せずに」死んでしまった。あんなにのんびり小鳥判定の賭けをしていたのに、あつかなかつた。加美川部隊は、何事もなくランザン部落に到着し、オンギンを呼ばせた。

「ケンチジカツカ、ゴキゲンウルハシクテ、ケツコウニロンジ
タテマツリマス」

オンギンは媚びをふくんで、日本語で流暢にいつた。県知事閣下——その県といふのは、テイデウム県である。軍政が布かれてゐるため、特種工作隊長たる加美川中尉が知事となつてゐた。みづから任命したことは、いふまでもない。

(『異民族』347頁)

オンギンは、みづから任命し県知事である加美川に丁寧日本語で挨拶した。続いて次のような会話をする。

「今日は、率直に話をしたい。もはや、事態は、あやふやなことを許さぬまでに、切迫してゐる」

加美川中尉は、地に立てた軍刀の柄に、両手をかさね、するどく冷たい眼で、オンギンを睨みすえた。〔異民族348頁〕

加美川は部下を失った怒りのために、オンギンを疑っていた。

「なにごとでせうか」

まだ三十に満たぬオンギンの秀抜な顔は、あきらかな狼狽と不安とに曇った。(中略) 相対した二人の尋常でない様子には、部落全体のものにも、或る予感をあたへて、とりまいてゐる多くの顔のいくつかは、すでに不安で凝結してゐた。自由も意志もない民族の顔にも、感覚と感情とは露骨だった。

「君は隊長の命じた仕事を、もつとも、不忠実に果した」

「忠実に果しました」

飛びあがらんばかりにびつくりして、オンギンは、忠実に、といふ言葉を声高くくりかへした。〔異民族〕348〜349頁〕

トンザンでの工作を命じられていたオンギンは、突然予期もしな

いスパイ嫌疑をかけられ、狼狽し必死で弁明をはじめた。

「ちがひます。嘘です。私は間違ひなく、五日間、トンザンに居りました。酋長に会わせて下さい。すぐわかります」

オンギンは必死に、その態度は乱れた。哀願する顔のなかに、恐怖が寸分の隙もなくひろがつて、まったく落ちつきを失った。

「君のゐたところを、隊長は知つてゐる」

オンギンの眼が白くひきつった。

「英軍の将校、ケリー大佐のところだ」

「ちがひます、ちがひます、そんな……」〔異民族〕350頁〕

実際、英軍ケリー大佐が原住民の特殊工作を行っていたようで、火野の『従軍手帖』の五月二十三日「テイタイム」にはケリー大佐のことが書かれている。

○江藤曹長の話。(前略) マニプール河の対岸は敵のつかつてゐるチンが出没してゐる。英軍ケリー中佐といふのが、工作をやつてゐるらしい。寝がへりはほとんどないが、一二あつて、油断はできない。この下にチン部落があるが、敵機にやられた。(中略)

英将校のケリー(来たときは大尉だったがもう中佐になつ

てゐる」といふのは敵ながらあつばれな奴で、チンに五年ゐて、チン語をしやべり、さかんにチン工作をやつてゐる。なかなかつかまらぬ。この附近の部落にまでやつて来て、演説をしたりしてゐる。

〔「火野葦平インパール作戦従軍記」136～142頁〕

オンギンは実在の人物だったようで『従軍手帖』五月二十九日には「オンギン（宣伝部長）」と書かれ、「若い男。彼は即興詩人らしく、今朝も詩を一つ作つたといふ。」さらに、同日には、

オンギンが立ちあがつた。チンの習慣では客を迎へたときには歌をうたつて歓待することになつてゐるので、歌をうたふが、そのかはり、日本の客人も日本の歌をきかせて貰ひたいといふ。

先日からのんであつた歌稿をタイプで打つてくれてゐたので、それを見る。オンギン歌ひだすと、郡長、酋長、はじめ、チン人たち、手を打つて合唱する。歌はきはめて単純で、節も単調。軍歌も、首狩り歌も、恋歌も、みんな同じ調子らしい。稲田中尉、軍歌を歌ふ。

〔「火野葦平インパール作戦従軍記」160頁〕

とある。このようにオンギンは快活で明るく人気者らしいが問い

詰められる描写は手帖にはないので、先にあげたケリー大佐が原住民を工作に使つていた事実を背景としておそらく名前だけを同名にして、日本軍を裏切る人物として作品の中に登場させたのであろう。作品は次の如く進行する。

「軍紀こそが最大の秩序だ。裏切りは、同志の死を意味する。

隊長としては、規律を守る以外に方法がない」

「県知事閣下、私を信じて下さい」

天を仰ぐオンギンの動作は、ひどく芝居がかつてゐたけれども、いささかの作為もない自然のものたることは、たれの眼にも明瞭だつた。
〔「異民族」350～351頁〕

ここで注意すべきは、オンギンの動作は大げさではあるが、全く作為なく自然に誤解をとこうとしてゐることだ。そして、

オンギンは地に額をつけ、加美川中尉の長靴にかじりついて、弁解をした。（中略）助けを求めらるやうに、部落民の顔を見まはしたが、観衆の顔にはかに表情をうしなつて、卑屈な無関心があるばかりだつた。白々しい壁のやうだつた。文字どほり、オンギンは慟哭して、芋虫のやうに、地をころげまはり、哀願した。命乞ひをした。
〔「異民族」351～352頁〕

こんなにも哀願しているのに、加美川は、非情にもオンギンの言葉聞き入れず、チン族達も「壁のよう」に無関心であった。そして加美川は到頭、

引きぬいた軍刀を、力まかせにオンギンの首筋にたたきつけた。不意に頭の消えた肩のうへから筋のやうに赤いものが散つて、胴体はまへのめりにたふれた。二間ほど先に飛んだ首は、筋肉が痙攣するたびに、右に左にしばらくくうごいた。

〔異民族〕 354～355頁

こうしてオンギンは惨殺されるのである。オンギンの斬首の様子は、火野の『従軍手帖』には記述がない。先にも述べたように、実際は即興詩人で歌を創る宣伝部長を任された人物であるだけだ。五月二十六日の『従軍手帖』には次のように記される。

○夜明とともに屯営を出る。まだ、当番もねてゐて、朝食の支度はできてゐない。西機関に行くと、隊長室の前で、稲田中尉が大きな声をだしてゐる。チン兵に訓辞でもしてゐるのであらう。やがて、その一隊が去ると、次の一隊。六人の武装したチン兵と、手ぶらの男二人。通訳。稲田中尉が中川一等兵をよび、手ぶらをしばらせる。敵のスパイをチン兵がつれて来たらしい。二人がぐるぐるにしばられる間、チン兵た

ちはなにかぼそんとした妙な表情で見えてゐる。見て居れないやうに横をむいてゐる者もある。しばらくしながら、チン人がなにかぼそほそいふのに、また、はばかりやうな声でチン通訳が答へてゐる。スパイをすでに十数人処断したといふことだから、二人も斬られるのかも知れない。

〔火野葦平インパール作戦従軍記〕 146頁

これは、火野が捕らえられたチン兵を見たり聞いたりしたことを記したものである。やはり、裏切りの嫌疑を味方の原住民にかけたり、ケリー大佐が工作に使った原住民を見つけると日本軍は処罰し斬り殺していたようだ。これらの実話を使いながら、加美川がオンギンを惨殺する場面を作品で創り出したのである。さらに作品では加美川の内面の描写や、原住民たちの様子が活写される。「広汎な地域で、言語、風俗、習慣を異にするチン族の掌握は容易でなく、県知事閣下も骨が折れるわけである。」とあり、加美川は次のように考えた。

物量のない日本軍が、土民を屈服させるには、力しかない。その結論にしたがつて、加美川はつねに堅確に行動して来た。オンギンがスパイであるかないかは問題ではない。スパイとして処断し、日本軍を裏切る者がいかなる目にあふかといふことを、彼等に印象づければ足る。それこそが彼の正義であ

つた。

〔異民族〕 354頁

のか。(傍線…論者以下同)

〔異民族〕 352～353頁

すなわち、オンギンがスパイである確信など加美川には毛頭ないが、そんなことはどうでもよかった。原住民を、日本軍に無条件に従わせるために、見せしめが必要で、オンギンはそのために犠牲にされたのであった。「加美川はオンギンがスパイであるといふ証拠をにぎつてゐるわけではない。(中略)怪しいといへばチン人はすべて怪しい。疑へば誰もかれも、スパイに思へる」ともあり、疑心暗鬼に駆られていくチン工作の中心人物加美川の心理、そして、彼にふりまわされる原住民が描かれる。「異民族」には、語り手による問いも描かれる。

オンギンはランザン部落生え抜きの青年なので、観衆のなかには、肉親がある筈だった。また、親戚も友人も、ひよつとしたら妻も恋人もあるかも知れない。しかし、壁のやうに群衆の表情は行儀正しくて、オンギンのために出てくる者は一人もなかつた。オンギンがいま死刑に処せられようとしてゐることは、もう皆にわかつた。しかも、日本軍独特の斬首の刑に処せられようとしてゐる。それを見すごさうとしてゐるのは、冷酷か、残忍か。エゴイズムか。雰囲気其自然な醸成が、感情も愛情も鈍磨させて、ただ損得計算ばかりをさせるのか。瞬間への不信心か。時間の運命へ漠然とたよつてゐる

この語り手の問いは、戦争という異常な場所で、また、自らの生死も危ぶまれる中で、オンギンを救おうとしないチン族達のエゴイズムをエゴイズムと言えるのか、それとも感情が鈍磨して人間性を失っているのかという究極の問いを突き付ける。

処刑者たる加美中尉には、なんの昏迷もなかつた。偉大な目的と、その感動のみが彼の全霊を占めてゐて、彼はむしろ昂然となる。(中略)人間を斬る快感や、英雄的興奮など、彼にはない。この行動自体に彼の欲望も満足もなく、深遠で大きな最後のものが、彼をとらへてゐる。〔異民族〕 353頁

加美川は決してオンギンを斬ることに快感を感じたのでも、英雄になりたかつたのでもない。「深遠で壮大な最後のもの」すなわち、日本軍の勝利のために、故国日本のために、軍人としての任務を全うするということであつた。インパール作戦という行き詰つた中でも軍人としての責務を遂行する加美川の姿が描かれる。

三 兵士らの裏切りとナガ族部落

インパール作戦はいよいよ逼迫し、「異民族」の半ばには、加美中尉の次の言葉が描かれる。

(前略) 最終的手段で、敵陣地や戦車を爆破するといふんで、ダイナマイトを百キロ送ったんだ。それが、前線に届くことは届いたんだが、……例によって半月もかかつてね、……役に立たないんだ、少なすぎて。二十キロもなかったといふんだよ。途中で、兵隊が食ってしまったんだ。ありや、すてきに甘いからな」

〔異民族〕 358～359頁

ダイナマイトを、砂糖のなくなつたとき、兵隊が食べるのは、いまにはじまつたことではなかつた。羊羹のやうに甘いのである。(中略) 食べすぎると下痢したりするが、害にはならない。前線では糖分の欠乏とともに、塩分もなくなり、兵隊たちは汗をなめてゐることだつた。

〔異民族〕 359頁

ダイナマイトを食べていたことは本当だつたやうで、火野の『従軍手帖』五月三十一日にも、

前線にダイナマイトを百キロおくと50キロしかないといふ報告が来る。兵隊が食ふのである。甘味があつて、羊羹より柔いし、切り餅くらゐの大ききさで手ごろなので食べるのだが、食ひすぎると下痢する程度。

〔火野葦平インパール作戦従軍記〕 163頁

とある。とにかく食料がなく、餓死寸前の前線の兵士の様子や、武器調達の困難な様子が実際のインパール作戦と同様に作品中でも描かれる。このような食糧事情を少しでも打開しようと、加美川部隊はナガ族の部落に危険を承知で遠征しようと計画した。そこにはどうも英軍工作隊の手が入っているとされる。ナガ族については、「槍使ひは名人」とあり作品に次のようにある。

〔前略〕 ナガ族といふのが、物騒なんですよ。精悍といふか、暴勇といふか、一種の野蛮人ですな。チン族と大して風俗習慣が變つてゐるやうには思はれんですが、争鬪を好むところは、論外です。おまけに大家族主義で、部落外の者とは婚姻せずに、他部落とは、はげしく対立してゐるやうです。部落ごとに言葉もちがつてゐる模様で、ときどき喧嘩をする。

(中略) 部落全体が襲撃を掛けて、その部落中の者をみな殺しにしてしまふ。焼きはらつてしまふ。おまけに、人肉を食ふ習慣があつて、育ちさうもない赤ん坊は殺して親たちが食つてしまふ」

〔異民族〕 359～360頁

ナガ族についても『従軍手帖』五月十八日インタンギでの記載に同盟通信社の野口記者から聞いた話として記されている。

同盟《通信》の野口君、また来る。ナガ族の話。風俗習慣は

大体似てゐるが、部落ごとに言葉が全くちがふ。これはチンとよく似てゐる。大家族主義で、部落外の者とは絶対に婚姻せず、部落同志でさかんに鬭争して来た。その原因が、頭の髪を丸坊主にしたとか、結び方が左に寄りすぎたとかいふやうなつまらない理由で、殺到すると、一人のこらず殺戮をしなければ。人間を食ふ習慣があつて、育ちさうもない幼児は殺してしまふ。槍をつかふことの名人。コヒマ方面は民情が悪くて、徴発に行つて、下士官が殺されたり、刺されたりした。敵を誘導して来る奴もある。

（『火野葦平インパール作戦従軍記』119頁）

この野口記者の話を「異民族」に生かしていることがわかる。また、加美川の部下の仁木軍曹が、チン兵のフセンキオを加美川に無断で上等兵に昇級させた点を加美川に非難されたことが作品に描かれる。加美川は、日本人の部下にも裏切られる。仁木軍曹は激しく叱責され、右頬を加美川に打たれた。仁木軍曹は「チンの女キムトイに心を惹かれて、その歡心を買ふために、弟のフセンキオをこつそり一階級あげたにすぎないのである」。「仁木はずでにキムトイに、他の女の倍の賃銀をはらひ、食糧や煙草なども余分にやつてゐた」。

女に惚れたために、大胆不敵にも仁木軍曹は軍の規律に違反して勝手なことをしてしまった。仁木は厳しく非難されたものなの

んとか追放を免れたが、こうして加美川はますます兵士たちが信じられなくなつていく。こういう勝手な部下はやはりいたらしく、火野のランザンでの『従軍手帖』五月二十六日にも、稲田中尉の次のような態度が記されている。

整列して敬礼する衛兵。分隊長三名、小隊長一名の進級式があるといふ。徽章がないから、曹長は来週日曜まで日のべ。私情に駆られて進級させると処罰するぞ、と稲田中尉、兵隊をたしなめてゐる。厳格な隊長らしい。

（『火野葦平インパール作戦従軍記』153頁）

また、五月三十日にも「大久保君、やつて来る。稲田中尉が厳格で、兵隊をなぐる話をする」とあり、加美川のモデルとされる稲田中尉は、規律を乱す兵士達を厳格に罰する上官だったようだ。この仁木軍曹の不祥事のあと、チンの女キムトイとオンギンの妹ニアングは逃走してしまつた。仁木軍曹は、治療薬すらないのに現地の女キムトイに花柳病をうつされ、フセンキオは分隊長となつた。ちなみにこの二人の女は手帖には登場しない。

「病院を抜け出した者」や、裏切る人物は他にも作品に登場する。神部少佐や松田少佐などである。神部少佐は、気が変になつてゐる様子で、一方、松田少佐は、次のように作品中で描かれる。

松田は百地連帯の大隊長なのであるが、故意に戦場到着をおくらせることが重なり、作戦にしばしば齟齬をきたさしめた。雨が降つたとか、ジヤングルに迷つたとかいつて、前線に出ようとしないのである。〔異民族〕 369頁〕

遂に、軍法会議に附されるため、憲兵つき添ひで、後方へ送られることになつたのである。それがまた松田少佐にはうれしくてたまらぬ様子に見える。恐しい前線から安全地帯へ行くからだ。〔異民族〕 369頁〕

松田少佐は「百地連帯の大隊長」とあるため、本来は、率先して軍の司令に従わねばならないはずなのに、前線に出ようとせず、軍法会議にかけられることになつたのである。安全地帯に行けると、嬉しそうなのも軍人なのに異様である。まさに末期状態のインパール作戦の様子が描かれる。この松田大佐に酷似した人物も六月二十二日、インパールまで三二九九mの地点で書かれた『従軍手帖』には登場する。

隊長室に行くと、稲田中尉と少佐の肩章のある背のひくい将校とが話をしてゐた。丸顔を髻で埋め、ぐるりとした丸い眼でまじまじと見る。稲田中尉から田中少佐だと紹介されて、この人かともう一度見なほした。作問部隊の大隊長で、兵隊

たちが、敵は英軍でなくて田中少佐であるといつてゐるといふことをきいたことがある。〔『火野葦平インパール作戦従軍記』 219頁〕

さらに七月四日コカダンでの『従軍手帖』には田中信男師団長から聞いた話としてこのようにある。

笹原聯隊長も作問部隊長も立派な人だ。青砥大尉もなかなか立派で、みんながみんなになつてくれたらなんでもできるだらう。大隊長はみんな死んで、四人しか残つてゐないが、一人は軍法会議に廻した田中少佐、あとは負傷や病気がかり。実際よくやつた。〔『火野葦平インパール作戦従軍記』 264頁〕

おそらく、松田少佐は、「作問部隊の大隊長」とあるので、作問聯隊（二一四）の「第三大隊（第九中隊欠——大隊長 田中稔少佐）」を指すと思われる。田中少佐は前線で無意味に戦うことをしなかつたようだ。師団長は「主力方面に追及を命じていた」が、田中少佐は「師団長の見るところでは、その行動敏速を欠き聯隊主力の危急に馳せ参ずる気魄に欠けていた」¹⁰と記録されている。田中稔少佐のような、軍命令に逆らう軍人がいた事実から松田少佐は創りあげられた。加美川は、松田が喜ぶ様子を見て、「軍法会議など、まどろこしい。どうして、前線で銃殺してしまはないの

か。むしろ、斬首すべきだ」と考える。どんなに戦線が危うくなるうとも、加美川は厳格な軍人で、日本の戦勝に向けて任務を全うしていた。「異民族」には、柳田元三師団長をモデルとした、曾田中将も登場する。柳田中将は、「弓」師団の最初の師団長だが、しばしば軍司令官牟田口と意見対立し、具申書を提出し、牟田口を激怒させた¹¹。そのため、五月十二日、「弓」師団長を罷免され、参謀本部付となる¹²。そして新師団長に田中信男中将が就くこととなった。曾田は次のように語る。

前線から弓師団の前師団長がかへつて来た。作戦停頓の責任を問はれて、更迭せしめられたのである。

「俺は生ける屍だ」(中略)

——こんな無茶な作戦はない。(中略)全滅することはわかってゐるのに、面目とか顔とかいつて、突撃の命令を出す。兵隊を殺すばかりだといつてもきかない。自分がいふことを聞かないので、首にしてしまった。こんな戦になつて、誰が来たつて同じだ。諸葛孔明だつて、楠正成だつて、起死回生の妙策はない。軍司令官は、まだ、突撃をやりたいがつてゐる。……曾田中将は憤慨しては、自分は生ける屍だとくりかえし述べた。

(「異民族」370頁)

作品中には「生ける屍」という言葉が繰り返されるが『従軍手帖』

の五月二十八日(テイデム)にこのようにある。

ビシエンプールまでは開闊地なので、山を行つたが、山蛭にみんな噛まれた。自分のこの痕はみんな山蛭で、シャツの中まで入つて来る。一度、夜襲をやると、すぐに百名の犠牲者。自分は坊主になつて部下を葬つてやりたい気持。誰がやつてもさううまくいかない。有史以来の戦争かも知れない。自分ではよくやつたつもりであるのに、何故変へられるかわからない。どこが悪いとはつきりいつて欲しい。

軍司令官はすぐ後に来て、しきりに尻をたたたく。征馬は思ふやうに進まない。自分も身心ともに疲れた。死ぬつもりであるのに、生きてかへるとは不本意。全員、未帰還の決意で、自分も遺書をつくつて副官にあづけておいたが、こんなことになつたので、とりかへして来た。生ける屍も同然だ。

(『火野葦平インパール作戦従軍記』156頁)

柳田は無茶な戦場で死んでいった部下たちを気の毒に思っていた。そして、死ねなかつた自分を悔い、「生ける屍」という言葉を使っていたのである。

加美川は曾田中将にチン兵たちと「握手をしてやつて下さい」と頼む。なぜなら、更迭されて師団長の任を解かれて交代させられようと、中将という身分の曾田は立派な肩章をつけ「その權威、

そして、その効果」は絶大の威力があつた。チン兵達は「緊張し、敬虔の面持」をしていた。

いちいち手をかたく握りながら、曾田中将は、御苦労、御苦労といった。チン人たちの顔がほころび、忠誠を誓ふ念が一段と深まつたと観測して、加美川は満足だつた。

〔「異民族」37頁〕

火野の『従軍手帖』五月二十八日にも柳田中将がチン兵と握手する記述もある。

○郡長トワルカム、酋長ボンザマン、挨拶する。土産を持つて来る。閣下は立つて行つて、握手をする。民族の指導が大切だよ、と稲田中尉にいふ。満洲で白系ロシア人を工作してゐた人の言葉ときく。

〔「火野葦平インパール作戦従軍記」157頁〕

ただ、もちろん、加美川が考えるような、位の高い軍人がチン兵と握手をすることで、チン兵の忠誠心が深まるなどという裏の理由は手帖には記されない。加美川は常日頃からチン兵を日本軍に無条件に従わせる術を考へていた。

さて、二章であげた加美川の原住民惨殺、三章で記した仁木軍

曹、松田少佐ら日本軍人の裏切り、柳田中将の悔恨の心情などが「異民族」に記されるのは非常に重要である。戦争中、火野は「麦」と兵隊」「土と兵隊」「花と兵隊」などの兵隊三部作を発表し、ミリオンスターとなつたが、戦争中は作品を発表する時には、軍の厳しい検閲を経なければ発表できなかつた。ちなみに、葦平自身が記した、当時の軍の禁止事項を簡略化してあげると次の七項目である。火野葦平「解説」〔「火野葦平選集第二巻」¹³⁾〕には次の如くある。まとめて記してみる。

第一、日本軍が負けているところを書いてはならない。

第二、戦争の暗黒面を書いてはならない。

第三、戦つている敵は憎憎しくいやらしく書かねばならなかつた。味方はすべて立派で、敵はすべて鬼畜でなければならぬ。

第四、作戦の全貌を書くことを許さない。

第五、部隊の編成と部隊名を書かせない。

第六、軍人の人間としての表現を許さない。分隊長以下の兵隊はいくらか性格描写が出来るが、小隊長以上は、全部、人格高潔、沈着勇敢に書かねばならない。

第七、女のことを書かせない。

女に溺れて、軍の規律を守らない仁木軍曹、加美川中尉のチン兵

惨殺、松田少佐、柳田中将らの更迭の様子など、戦時下では描けなかつた戦争の暗黒面を「異民族」では赤裸々に、リアルに描いている。その点は、戦後の戦争を扱つた火野葦平文学作品の大きな特徴であり、興味深いところだ。やっと自由に戦争の真実を暴くことができるようになったのである。

四 モン・サンカインの榮譽の死

フセンキオ分隊長を連れて加美川中尉達は、人食ひ部落へ向かつて前進する。加美川らは、「雨に打たれ、橋のない濁流を胸まで浸つてわたり」行軍した。加美川は、「得意の絶頂」にあつた。「彼を支へる偉大なる目的への奉仕感、かういふときに、もつとも情熱的に燃え、傲岸にちかい自己満足となつて、彼を英雄的興奮にみちびく」。加美川は、日本軍の食料確保の目的でナガ族部落に行こうとしていた。それは、日本軍を有利にすることであり、その時、失敗するなどは脳裏を掠めず加美川は英雄のような気持でいた。加美川は古くからチン族に伝わる戦勝歌を歌いだし、チン兵もそれにつられて歌いだした。「士気は大いにあがる」。しかし、チヤカン部落が近づき、夜になると、突如、「戦闘は思ひがけぬ場所」でおこつた。

空家になつた十軒ほどの小部落を見つけて、そこへ野営したのだが、思へば、敵の衝中に完全に落ち入つたわけであつた。

(中略) わざわざ敵が空家の囹をこしらへて待つとまでは、気がつかなかつたのである。
〔「異民族」377頁〕

歩哨三人は、「背後から槍でつき刺されて、声もなくなつたふれた」。

宿営して寝についてゐた部落は、いつか包囲されて、齒車の中心に向つて集中するやうに、軽機、小銃を射ちこまれてゐた。槍が無数の針を投げるやうに、飛んできた。

放たれた火によつて、あたりは真紅に照らされた。手に手に槍や大刀をにぎつた、鬼のやうに真黒いものが、鶏のやうなけたたましい声を發して、なだれこんできた。

〔「異民族」378頁〕

加美川中尉も「拳銃をにぎつて、見つけ次第に敵を射つた。しかし、弾丸はすぐ尽きた。抜刀して、敵に向つた」。「仁木軍曹が、針鼠のやうに槍を立てられてゐるのが見えた」。

焰のなかの乱戦で、戦闘の秩序も、指揮も、掌握も、まつたく不可能といつてよかつた。加美川は齒がみした。格闘と、叫喚と、悲鳴と、血しぶきと、積みかさなる屍体と、まさに地獄囹に異らなかつた。夢中で、敵を斬つた。
〔「異民族」378頁〕

加美川の背にぶつかってきたものがあつた。モンサンカインであつた。「胸に長い槍が突き刺さつてゐる」。

反射的にふりむいた加美川は、大刀をふりかぶつて背後にのしかかつて来る蛮人を、横払いに斬つた。漆黒の巨体が、モンサンカインのうへに重なつてたふれた。「異民族」379頁

モンサンカインは、実在する人物で、火野の五月十七日インタンギでの『従軍手帖』に、正田大尉が語つた話として登場する。

○（正田中尉）コンタといふ町で、モン・サン・カインといふ工作員を得た。これが二度も自分の命を助けてくれた。はじめは英国に心をよせてゐたが、ポンジー・チヨン（寺）で誓ひを立ててからは、こちらに忠実になつた。眼つきの鋭い小男で、はじめは敵のスパイではないかと思つた。工作隊員をつれて、パコダ^{ママ}に行き、ポンジー（坊主）に、宣誓式をやるといつても、坊主が殺人をやる戦争のために、さやうなことはできないといふ。自分はパコダ^{ママ}の前に、ビルマ人と同じやうな式で、ぬかづいて礼拝した。それから、ポンジー説得に一時間かかつた。英国こそベア（神）に反く者である、これを倒するのが日本で、それは神の命によつたものである。やつと納得したポンジーは工作隊員の宣誓式をしてくれた。

敵情があると聞いて、ある部落に行つた。藪のなかから敵にうたれ、自分の前にゐたモン・サン・カインが腹を射たれた。看護兵はもう腸が出てゐるから助からないといふ。可哀さうなことをしたと思ひ、なにかいひのこすことはないか、あとは心のこりがないやうにしてやる、といつても、ベアのため

に死ぬのは本望だ、なにも心のこりはないといふ。死んだ。
（『火野葦平インパール作戦従軍記』115頁）

最初は「眼つきの鋭い小男」であつたが、モンサンカインは、正田中尉の盾になつて、「ベア（神）のために死ぬのは本望だ」との言葉を残し中尉を救つたのであつた。先にもあげたように最初は「異民族」の中で小隊長モンサンカインは、「吊りあがつた狐のやうな眼だけが際だつて白く鋭く光つてゐる」と描写されていたが、この『従軍手帖』での記述と同じように加美川を救ひ加美川の盾となり代わりに槍で突かれて死んでいった。

『従軍手帖』によると、その後、「武装の整はないときで、竹槍などを持つてゐたが、その竹槍を柵にして、モン・サン・カインの墓をつくつてやつた。」という。そして正田中尉は次のように述べた。

埋葬する前に、自分が感慨無量で、死体の前にしやがみ、頭をなでてゐると、爆音がした。敵機だと、みんな藪のなかに

とびこんだ。とたんに、だだど音がした。爆弾にしてはをかしいと思つてゐると、前方の竹藪が波をうつてたふれてゐる。それで、近くの敵が自動小銃を射つたのだとわかつた。それで、自分の背後で狙つてゐたのが、間一髪、敵機のため

に助かつたのだとわかり、ひやりとした。モン・サン・カインがまた自分の身がはりに、頭部に穴をあけられてゐた。

〔異民族〕には、『従軍手帖』にあるように、死体のモンサンカインが正田中尉を二度目に救つた点は、使われていないが、神のもとで日本軍に忠誠を誓い、戦つたチン兵であつた。加美川が歌を歌いながら行軍していた時、モンサンカインも加美川の「耳元で割れるやうな声」で和していた。その時のモンサンカインは「いっになく生き生きとかがやいて」おり、加美川は「天に昇る心地」であつた。平和で、楽しい気持ちは束の間、あつという間に敵に襲われ、血まみれの戦場となつた。戦争は、平穩な日常を見るも無残に破壊する恐るべき魔物なのである。

五 瀬川軍司令官の思想

モンサンカインを失つた後、加美川部隊はチン丘陵にさしかかる。チン丘陵は、美しい場所で、

霞んだケネデ・ピイクの頂上に、円光のやうに、くつきりと七彩の虹が浮き出てゐる。雨がすぎると、かならず虹が出た。(中略)虹の門のなかに、急速にふくれる風船玉のやうに、青空がぐんぐんひろがつて来た。

〔異民族〕379〜380頁)

と記されている。このチン丘陵も実際美しかったらしく、『従軍手帖』五月二十日に次の如く記されている。

顔前^(まへ)に見えて来たチン丘陵。(中略)。幾重にも重なりあつた山々が、色のちがつた霞の幕で掩はれたやうに異つた色をし、降つたり止んだりする雨と、曇つたり晴れたりする空の下に、次第に下方へ遠ざかる。美しい虹。山を横に見てゆくのかと思つたら、さうではなかつた。越えてゆくのである。

〔火野葦平インパール作戦従軍記〕125〜126頁)

加美川部隊はトンザン部落に行き、第十五軍司令官瀬川中将らとともに、酋長ボンザマンからチン酒ヅ——を振舞われ、接待を受ける。「隊長室の卓には清廉な白布が延べられ、ティデム最高の献立がならべられてある」。

いま、インパール作戦の最高指導者たちが、ずらりとならんでゐる。第十五司令官瀬川中将、参謀長奈々木松也中将、高

級参謀山下大佐、それに、弓師団後方参謀高椋少佐。下座には、加美川中尉とならんでトンザン酋長ボンザマン、テイデイム県教育主任ブンコハウ、労務課長カンチユクン、酌をするために選ばれて来たチンの女三人。〔「異民族」381頁〕

とある。もちろん、瀬川中将は、牟田口廉也中将を指す。『従軍手帖』五月二十九日のテイデムでの記述にテイデイム酋長トワルカムヤボンザマン酋長らから接待されたことが以下のようにある。

○会食。第二高等官宿舎と札の出でゐる建物に、準備されてゐるテイデイム最高の料理。いつもは山崎（カチン族の兵につけた日本名）がやるが、今日は小澤一等兵の腕の由。白布をかけた卓の上にある花、薔薇、百合、セクパン、など。チン人に、花の名をきくと、どれも、パ、パ、とひひ、all same などといふ。チン人たち先につき、王様稲田中尉は最後におもむろにあらはれる。

○テイデイム郡長トワルカム
トンザン酋長ボンザマン、50歳
ラルドン（フアラム、クラウ酋長の息子、県書記）
オンギン（宣伝部長）
ブンコハウ（郡、教育主任）
カンチンタン（宣伝部員）

カイムンマン（郡書記）

キヤンピユウ（労務課長、苦力係り）

バウザカン（^{ママ}徴募課長、野菜、肉類など）

○ZUをあげて乾盃。ランザンで飲んだよりも甘い。チン人のなかにはラングリーンを知つてゐる者半分くらゐで、大学に行つてゐた者もあつた。純朴で快活な種族らしい。

〔『火野葦平インパール作戦従軍記』158〜159頁〕

五月二十九日の宴席には牟田口軍司令官は登場しないが、加美川中尉のモデルとされる、稲田中尉は、トンザン酋長のボンザマンから高級料理の接待を受けている。火野も稲田中尉と共にごちそうになった。この宴席に牟田口軍司令官も一緒だったことにして作品に描いたのだろう。「異民族」には瀬川軍司令官が次のように語る描写がある。

「この戦は勝つよ。大丈夫だ。俺を信じてゐてくれ。（中略）俺は戦運のよい男だ。きつと勝つ。（中略）俺はいつでもいつてやるんだ。勝利の神が瀬川を見放すわけがないぢやないか、つて。戦争は神聖なものだ。戦争は戦争の神聖さを信じて、これに没入する者に、いつでも勝利をあたへるんだ。俺はいつも部下へ三つのホルモン注射をする。第一は、必勝の信念、かならず日本が勝つといふ強固な確信をもつこと、第二、戦

〔『火野葦平インパール作戦従軍記』166～167頁〕

争は外国人の考へるやうに、悪ではないこと、正義の師は善なること、第三、人生の完遂は臣下としての任務完成以外なにもないこと。こんなこと、みんな当りまへのことばかりなんだよ。この三つが心魂に徹してゐたら、これくらゐの戦、なんでもないんだ。(後略)〔『異民族』383頁〕

火野の『従軍手帖』六月一日のテイテムでの記述に、牟田口軍司令官が火野に語った話として以下の如くある。

○あなたの書いたものも拝見したが、戦争は神聖なものだ。すべて大君へささげまつると一念あるのみ。いつも部下に話をするのだが、三つのホルモンの注射をする。第一は戦争は必ず日本が勝つ、第二は戦争は外国人の考へるやうに悪でなく善であること、第三は人生の完遂は臣下としての任務の完成以外にはないこと。(『火野葦平インパール作戦従軍記』165頁)

○今度の戦争はなかなか大変だが、大したことはない。自分は戦運のよい男だが、今度の戦もうまく行くものと信じてゐる。いくらか、おかれてはゐるが、大丈夫だ。東京の方や、後がやあやあいふので、少々、遅延仕り申しわけなしといつてやるが、いろいろな点から、現在の戦情はやむを得ない。

これらの『従軍手帖』での記述は、ほぼ「異民族」と同様の内容である。火野に牟田口が直接語った実話をもとに「異民族」での瀬川中将の話を造形していることが分かる。

また、「異民族」には、瀬川軍司令官が、次のように無駄の大切さを説く場面がある。

「無駄の大切さ、これだね」

ぼつんと、軍司令官がいつた。なんの意味かわからなかつた。

(中略)

「無駄の意味を理解しないものには、大事はできないよ」話に調子がつくと、軍司令官は、身ぶり手真似で、急に能弁になつた。「現住民に気前よくしてやることも、大切な無駄だ。(中略)無駄を大切にすることは、結局、余裕をつくると同義語だ。(後略)〔『異民族』382頁〕

この無駄が大切だと力説する内容も、『従軍手帖』には見られる。牟田口軍司令官は、

○ものごとは無駄を大切にしないで《は》ならん。今日だけの露営といふと、それだけの設備しかない。すると一日が

二日になり、三日になつて、困るので、またやりなほす。たとへ、一日でもちやんとしてをく心(こころ)がけが必要。金などもけちけちせずに使ふがよい。一億万円つかつたところで、戦に勝てば安いもの。現住民などにも気前よくしてやつたがよい。無駄を大切にすれば余裕をつくと同じ。

(『火野葦平インパール作戦従軍記』166頁)

実際に牟田口も、無駄が必要だと説いていたのであろう。瀬川軍司令官の「戦争は神聖」で、「戦争は戦争の神聖さを信じて、これに没入する者に、いつでも勝利をあたへる」などの言葉や、「無駄を大切にすることは、結局、余裕をつくと同義語だ」などの言葉は、前線で日夜死と直面している兵士達には全く理解できない机上の空論である。作品中でも、「前線から兵隊は、瀕死の状態といつてよかつた。(中略) テイデイムまで来ることのできた者は、亡霊といつた方が近かつた」とある。「無駄」など前線にはあり得るはずがない。多くの兵士は、犬死し、負傷しても食べ物もなく、餓死していた。一方、瀬川は、御馳走まで出される比較的 안전한日本軍の基地に滞在していて、まるで、このインパール作戦の悲惨な状況がわかっていない。軍の上官と、前線の兵士とはこれほどまでに懸隔があつたのである。

六 瀬川中將の暗殺未遂

宴席の後の夕刻、軍司令官ら一行は出発した。「自動車の扉がひらかれて、軍司令官が前かがみに、片足を車にかけたとき、一発の銃声がした。すぐ傍だつた。弾丸は軍司令官の左袖をかすめて、自動車の窓硝子を割つた」。瀬川を暗殺しようと、一兵士が銃を撃つてきたのであつた。「加美川はその兵隊の拳銃をにぎつた腕をとらへた」。その兵士は「乞食のやうな襤褸の、青ざめた、髭面の兵隊である。眼窩はくぼみ、頬はぼつかりと二つの穴があいたやうに落ちてゐて」、「伍長」だつた。加美川はこの兵士を捕まえ、「銃殺だ。ただちに、処刑せよ」と命じる。「しぼりあげられた」この兵士は、「チン人のスパイヤ、不軍紀の者が処刑された」兵士らがいっしつか「鈴ヶ森」と呼びならわした場所に連れていかれた。「赤土の崖を背景に立てられた太い棒杭に、襤褸の兵隊は、くくりつけられた」。兵士は次のように言う。

「中尉さん、あんた、わたしを殺すのですかい」

「さういふ命令をうけた」(中略)

「どうぞ殺して下さいよ。どうせ、こんな身体ぢや、どこかで野たれ死にするにきまつとる。(中略) 中尉さん、あんたはこんな後方で、贅沢しとるから、なにも知らないんだ。(中略) わしら兵隊を殺しとるのは、イギリスでなうて、瀬川だとい

ふことを、みんな知つとるんだ。前線では、兵隊の敵瀬川を殺せ、というて、兵隊の暗殺隊が、いくつも、軍司令官を探しとるのを、あんたは知つてなさるか(中略) 兵隊のために瀬川を殺してやらうと思つたんだ。わしは、瀬川をはじめ、あんたたちが、女を侍らせて、飲めや歌へやをやるのを、空腹と高熱で、目まいをおぼえながら、じつと見とつたんだ(後略) (『異民族』 388～389頁)

『従軍手帖』の七月二十二日には、

烈兵団長も変つた。牟田口閣下は毎日粥を二度食つては毎日釣りをしてゐる。今度の作戦の責任を負つて自決するのではないかと見てゐる者もあり、また兵隊のなかには牟田口を殺すといきまいてゐる者もある。(『火野葦平インパール作戦従軍記』 323頁)

とある。「異民族」にあるような、牟田口軍司令官の暗殺未遂の様相は『従軍手帖』にはないが、手帖には「兵隊のなかには牟田口を殺すといきまいてゐる者もある」とあるので、自分たちの未来は全滅、餓死しかないのに、のんびりと優雅に過ごしている牟田口を恨み、やりきれない兵士たちはたくさんいたようだ。「異民族」では、瀬川を暗殺しようとした兵士は「殺されても、わしが

瀬川を兵隊の敵と思ふ心は変りやせん。そして、わしを殺さうとするあんたも、やつぱり兵隊の敵と、わしは……」と言い終わらないうちに加美川が「射て」と命じた。「チン兵の揃へた十挺の小銃は、一発もはづれず、標的に命中した」。ここには、インパール作戦への批判、そして悲惨で無残な戦争を引き起こし、長引かせた軍上層部に対する痛烈な抗議の思いが込められている。

七 加美川中尉の最期

チン兵は、もとは「二百名に近かつたのに、戦死と、逃走と、裏切とで、現在ティデウムに止まつてゐるものは、三十数名」にすぎなくなつた。「パンをあたふる者に忠実なれといふことを、唯一の生活信条としてゐるゴルカ兵モンバハドルは、チャカンで、英軍の方に投じた」。ゴルカ兵の性質については、『従軍手帖』の七月二日ライマナイでの記述に、

ゴルカ兵。中には手に銃剣をつきさしたり、石礮をのんで下痢したりして戦線からの離脱をはかる者もあるらしいが、督戦がきびしいので、なかなか勇敢にやる。パンを与ふる者に忠実なれといふのが彼らの信条で、こちらに来ると、こちらに忠実になる奴らだ。味方の陣地もなるべく敵にくつつけて作るがよい。 (『火野葦平インパール作戦従軍記』 253頁)

とあり、「異民族」にもこの性質は生かされている。

加美川中尉は、凄惨な戦況の打開はできなくとも、「堅確に、情熱的に、いひ得べくんば、真に勇者となつた」。そして、

彼はひとたび立てた志をすてようとはせず、困惑と蹉跌とにあつて、その行動への意欲は、さらに燃えたつた。

〔「異民族」 390頁〕

加美川はどんなに苦境に立たされようとも、日本軍の勝利のために戦うという目的に忠実になろうと意欲を漲らせていた。加美川は、負傷していたが休息しようとはしなかつた。だか、そんな英雄気取りはほんのつかの間だつた。ランザンに入つて、「村長ブンジャンンの家の前の広場まで来たとき」、「巨大な爆発音とともに、加美川中尉は、はげしく地面にたたきつけられた。地雷であつた」。加美川は「背に裂傷をうけて、瞬時、気をうしなつた。苦痛で、目ざめた」。

瀕死の加美川の眼に、さまざまの顔が交錯し、重なりあひ、近づき、離れて見えた。そのなかには、ひとつも日本人の顔はなかつた。(中略)加美川は、そのなかに、村長ブンジャンン、助役クアルザチン、教育主任ブンコハウ、徴募課長トワルカム、小隊長キヤンピウ、分隊長タンコリン、トンザン酋

長ボンザマン、それから、女の顔、たしかに、オンギンの妹ニアング、……そして、これまで味方であつたこれらの多くの顔が、狂暴な憎悪をたぎらせて、自分に殺到してくるのを見た。

〔「異民族」 392～393頁〕

加美川が起きれないほどに弱つた状態になると、「嘗て白々しい無表情の壁であつたものが」、「団結して、加美川中尉の身体に、槌、鎌、棒、長刀^バをうちかけてゐる」。すなわち、寄つてたかつてチン族達が加美川に武器を持って襲い掛かつてきたのである。チン族達は日本軍を裏切つていた。「加美川は変化しなかつたが」チン族達は英国軍についていたのである。『従軍手帖』七月十六日に次のようである。

稲田中尉と小野軍曹とやつて来て、まだ渡れずにゐた、二日も待つたといふ。三浦参謀が行けといふのでトンザンに行くが、戦況がかういふ風である上に、定住せずしてうろうろと工作しても効果は上らない、と、なにか釈然としない様子である。ボンザマン酋長が頭が変になつて、ふらふらと敵側に行つた、どこかジャングルのなかにでもゐるらしいとのこと。あらゆる面に困難が倍加して来るやうだ。鍵田大尉にむかつて、稲田中尉は声を大にしてチン工作の実情と抱負とを説いてゐる。熱情にあふれた語調だが、どこか焦燥の感あ

るを感じる。〔火野葦平インパール作戦従軍記〕 306頁

五月二十九日には、日本軍にご馳走を振舞い、接待していたポンザマン酋長が英軍に寝返ったことを示している。まさに「異民族」と同様のチン族達の裏切りは実際にも横行していたのだった。こうして、加美川はチン兵に裏切られることになる。作品の語り手は次の如く言及する。

インパール前線のもたらした結果は、海嘯に似てゐる。チン丘陵全体を掩ひつくし、押しながすこの怒濤を、いかに勇猛とはいへ、加美川中尉が一個の力で、どうして押しかへし得ようか。壊滅した日本軍は、印度戦場を抛棄して、総退却をはじめた。決定的な敗北は、一切を徒勞と化せしめた、日本軍の位置を逆転させた。〔異民族〕 393頁

加美川がいかに、戦争や軍に忠実であろうとも、日々劣勢になつていくインパール作戦を日本軍に有利にさせるなど、もはや加美川一人ではどうにもならなかった。日本軍の敗北、そして加美川のチン工作の失敗は、まるで海嘯のような、大きな災害と同じだった。語り手はさらに次のように述べる。

国境の民族たるチン人の協力も裏切も、思想とはなんの関係

もない。正義も、義務も、使命も、理解も、そして、愛情すらも、根底的なものを持つてゐなかつた。暴力の脅威のまへに、弱小民族がつねにいだかねばならなかつたエゴイズムの悲しさ、正直さが、そこにあつただけだ。彼等には、勝利も敗北もないのである。(中略)暴風と、海嘯のなかくて、彼等の方法は、一種のマキアベリズムとなるほかはなかつた。〔異民族〕 393頁

チン族達には、「勝利も敗北」も本来は関係ない。過激で残酷ではあるが、もはや手段を選ぶことはできない。加美川を八つ裂きにするのは、平和をチン丘陵に取り戻すためである。平穩無事に、小鳥や、森林に囲まれて、部落を作つて生きていただけであるのに、インパール作戦のために、日本軍に無理やり工作されて、チン兵は利用されただけだ。彼らは「暴力の脅威」のために、日本軍に従つていたように見えていただけだった。すなわち加美川の「一切の営為が無への奉仕にすぎなかつた」のである。つまり、命を懸けて日本軍に忠実に任務を果たしていた加美川の軍人たる姿は、むなしく、馬鹿らしいものであつた。加美川は、

彼は自分の首が斬りとられるであらうことは疑はなかつた。嘗て、チン人が忠誠を示すために、白人の首を持つてきたことがあつたが、その同じ理由で、自分の首が英軍のもとへ持つ

て行かれるであらうと思つた。〔異民族〕394頁〕

先にあげた火野の五月二十九日の『従軍手帖』によると、次のようにある。

英人 (English fellow) は自分たちを軽蔑し、圧迫し、動物視して、ともに食事をするといふやうなことは更になかつた、自分たちはここに東洋民族としての日本人を身近に感じ、ともに戦ふ心が、腹の底から湧く、勝利はわれらのものであることは疑ふ余地はない、といふのである。

たしかに、彼らがお座なりの協力でないことは信じてよいであらう。トワルカムもその他の者も妻子持ちが多いのだが、ときには家にかへれといつても、とんでもない、戦ひが終るまでは妻子どころではないといふさうである。白人の首をとつて来る者もあるし、勇敢に自動短銃を持つて敵中にとびこんで行く者もある。

〔火野葦平インパール作戦従軍記〕159～160頁〕

チン族達は、実際のインパール作戦でも日本のために白人の首を差し出していた。加美川は瀕死の状態の中、かつて自分の盾となつて死んでくれたモンサンカインを思い出す。

モンサンカインが、工作隊への忠誠のしるしとして、白人の首をまつさきにつけてきたのであつた。たしかに、彼は自分の身がはりに死んだのだ。加美川はそのことを疑つてゐなかつた。(中略) 彼はそんなに自分を愛してゐたのか、それとも、忠誠であつたのか。生命を以てするほど。しかし、あのときは、加美川はモンサンカインが、行軍の途中、その武器ぶりを褒めてやつたことで、うれしかつたのだらうと考へた。人間はひとつの微笑のためにも死ぬのである。おだてられれば、どんな危険でもをかす。生命とは偶然にすぎぬ。

〔異民族〕394頁〕

加美川は、チン族達の「弱小民族がつねにいだかねばならなかつたエゴイズムの悲しさ」と、正直さを味わいながらも、日本軍のために忠実に死んでいったモンサンカインが浮かんだ。モンサンカインは加美川を、日本軍を「愛してゐたのか、それとも、忠誠であつたのか。生命を以てするほど」？。加美川の出した結論は、モンサンカインが死んだのは、「愛情」でも「忠誠」でもなく、煽てられて一時嬉しく思つたからであり、単に「偶然にすぎぬ」ということであつた。ただ一人加美川のために死んでくれたと思つていたモンサンカインですら、偶然の死に過ぎなかつた。やはり加美川が遂行し続けていた日本軍の任務は、「無」だつたと再確認する。先に、モンサンカインの死の個所の『従軍手帖』を

挙げたが、そこには、「ベアのために死ぬのは本望だ、なにも心のこりはない」という言葉を残して死んだことが記されていた。が、「異民族」では、モンサンカインは何の言葉も残さない。ただ死ぬだけである。「創作ノート」にも「生命とは偶然にすぎぬ」とあるが、モンサンカインの死が、加美川のためでも日本軍のためでもなく、あくまで、偶然であるという点を強調するため、あえて、手帖での、彼の最後の言葉は作品には使わなかったであろう。加美川は最期、

いま、ここにモンサンカインがゐたならば、どうするであらうか。加美川は半唇をひらいて、苦笑した。きつと、皆といつしよになつて、自分を襲撃するだらう。それで、よろしいのだ。 (「異民族」394頁)

と考へた。加美川にはもはやチン工作という日本軍の任務や日本軍に対する忠誠心などどうでもよかつた。人間を無理やり従属させるなど、最初から到底不可能なことであつた。モンサンカインが自分を襲撃しても悲しくもなかつた。軍の命令から解放され、ようやく、死を目前にして「しだいに、麻痺し、意識を喪失してゆきながら、加美川は眠るやうな柔軟な心情になつてゐた」。

蜂の巣のやうになり、寸断されてゆく加美川の死の耳に、周

囲の騒擾が、快い音楽のやうにきこえはじめた。そして、それは、たしかに、あの、小鳥の交響楽であつた。

(「異民族」395頁)

加美川は、殺されながらも、戦争や命令という呪縛から自由になつていたのである。最期加美川の耳には「周囲の騒擾が、快い音楽のやうにきこえはじめた。」すなわち、「小鳥の交響楽」が聞こえはじめるのである。そして、田谷が死んでから暗唱できるやうになつていた加美川は小鳥の鳴き声を「動かなくなつた唇」で繰り返し口ずさんでいた。

最期、加美川が小鳥の交響楽を口ずさむのにはどんな意味があるのだろうか。インパール作戦の戦場となつた、印度とビルマの国境の地域は、自然豊かで、時折虹もかかる。数多くの種類の小鳥が生息し、一斉に鳴けばまるで、オーケストラの合唱のような、まさに、絶景の場所であつた。戦争で浸食されなければ、実際にどこかで平和な場所なのである。小鳥はまさに平和のシンボルとも言える。チン族達は、

直接の戦争相手たる日本軍と英軍とは、まったく無関係にはからずとも戦場となつた付近に、昔から住み着いてゐただけのこと。普段は放擲されてゐたのに、戦争がはじまつたため、どちらかに附かねばならなかつた。

(「異民族」393頁)

だが、「彼等には、勝利も敗北もないのである。ただひとつ平和への希求があつた」。加美川も、死に直面し、あらゆる無用な呪縛から解き放たれ、平和への思いを強くし、小鳥の声を口ずさんだのである。何とも悲惨ではあるが、加美川が平和の本当の意味は、日本の勝利でもなく、軍命令を放棄し戦争をやめることだと理解した点には一抹の救いがある。

「異民族」の「創作ノート」には、「○殺人、欺瞞、暴力、狡知、策謀」などが列挙されている。まさに、これは戦争そのものの世界である。加美川は死の直前まで、こんな恐ろしい戦争と命令に忠実に生きていた。また、チン族も最終的には、マキアペリズムにならざるを得なかった。戦争とは、人間の美しさや愛情を奪い去る、悲惨なものだ。作品には、こんなことが許されるのかという戦争に対する怒りの思いが内包されている。さらに「創作ノート」は「○正しい死に方とは何か？ 美しい死に方？ 犬死？ 犠牲？ たれがこれを定めるのか。」ともある。オンギン、モンサンカイン、加美川、田谷、わずか二十歳から三十歳前半という若さで、みな尊厳を持って安らかに死ぬことすらできなかった。人の死を、上官や軍、国家が操作することなどありえないことだ。「○正しい死に方」「美しい死に方」とは、やはり尊厳を持って死ぬことだろう。いかなる人間も尊厳を持って死ぬことは必然である。作者火野は、戦争の批判と人間の尊厳の問題を「異民族」という作品に、浮かび上がらせたのである。作品の最後は、「ケネデ・ピ

イクの峰が青空にそびえ立つてゐる。」「妖怪じみた高山の不気味な眩やきは、一度通つた者には、忘れられない。」という言葉で終わる。自然は、愚かな人間のちっぽけな末路を泰然自若たる姿で悠々と俯瞰し、何かを眩やく。何を眩しているのか。こんな愚かなこと、すなわち戦争とは二度と繰り返してはならないという言葉かもしれない。

終りに

本稿では、チン族工作を命じられた加美川中尉はじめ登場人物の行動や心理描写、作品の語り手の言葉などを分析しながら、火野葦平インパール作戦『従軍手帖』と対比させて「異民族」を論じて来た。戦争の悲惨な実態と、任務に忠実であればあるほど人間性を失っていく軍の中間層の上官、前線での一兵士たちの姿、前線のインパール作戦の凄惨な状況が全く理解できない瀬川軍司令官など軍上層部の見識のなさなども作品には記されている。さらには、チン兵達の苦しみ、日本軍のエゴイズムによって平和な部落を荒らされた原住民の怒り、などが描かれていた。原住民達はもともと平穏に暮らしていたのに、突如工作員として戦争に巻き込まれ、穏やかな日常から「狡知、策謀」の入り混じる戦場に引きずり出される。その結果、手段を選ばないマキアペリズムに満ちた人間になってしまい、最後には、正義と平和を取り戻すために、殺戮の道に踏み込んでいく。すなわち「異民族」は戦争そ

のものに対する悲壮極まる実態を描いている。その実態をリアルに描くことで、戦死者への哀惜の念や、反戦の思いが込められている。戦争の、見るも無残な状況を、検閲も制限もない中で、自由な立場で描ききった本作は、戦後だからこそ出来ることでもあり、未代まで残る戦争文学の傑作と言えるのではなからうか。

注

- (1) 火野葦平「全アジアを文学の美しい鎖で」(アジア諸国会議準備委員会編『十四億人の声』(昭和三十年五月二十日、おりぞん社))
- (2) 磯部卓男『インパール作戦』(昭和五十九年六月十五日、磯部企画)
- (3) 『戦史叢書インパール作戦』(昭和四十三年四月二十五日、朝雲新聞社)
- (4) 2に同じ
- (5) 北九州市立文学館所蔵。縦19・6 cm横15・8 cm表紙に「Note Book」「ノオトII」「昭和23年9月起」と記された普通のノートに、多くの作品の「創作ノート」が記されている。
- (6) 解璞「『小鳥の交響楽』と異民族の言葉——火野葦平『異民族』試論」(『文藝と批評』平成二十九年五月二十五日)
- (7) 『火野葦平インパール作戦従軍記』(平成二十九年十二月十日、集英社)
- (8) 火野葦平『後書』(『青春と泥濘』昭和二十五年三月一日、六興出版)
- (9) 『戦史叢書インパール作戦』(同)『ビルマ作戦に関する回顧録』(元第十五軍司令官 牟田口廉也中将の手記)
- (10) 『戦史叢書インパール作戦』(同)
- (11) 右に同じ
- (12) 右に同じ
- (13) 火野葦平『解説』(『火野葦平選集第二卷』(昭和三十三年十一月三十

日、創元社)
(14) 東京都にある江戸時代から続いていた鈴ガ森刑場を指して使っていたのであろう。

The study about “different kind race” created by Ashihei Hino

—meaningless to war, the desire for peace—

MASUDA Chikako

Ashihei Hino's *Different Ethnic Groups* is a work depicting native spies during the Battle of Imphal. This work derives from Hino's actual experience during the battle. Real people noted in the narrative include individuals referred to by their real names, but also others noted by assumed names. Here we compare and contrast Hino's *Campaign Diary* of the Battle of Imphal with *Different Ethnic Groups*, considering which of the points made overlap with the actual battle experience and which do not. Using a creative note-taking approach, our ultimate goal is to study the themes of the works.

キーワード：インパール作戦 (Battle of Imphal)、火野葦平 (Ashihei Hino)、原住民 (Aboriginal people)、平和 (peace)